

基礎看護学実習 I で看護学生が学んだ対象理解の視点

高橋永子, 平瀬節子, 野村晴香, 清水暁美

高知大学医学部看護学科 〒783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮

The attitudes toward understanding patients that nursing students had developed through Basic Nursing Practice I

**Eiko TAKAHASHI, Setsuko HIRASE,
Haruka NOMURA, Aakemi SHIMIZU**

Dept. Nursing, Kochi Uni. Kohasu, Oko, Nankoku City, Kochi (783-8505) Japan
Department of Nursing, Fukuyama Heisei University
117-1 kamiwanari, Miyuki-cyou, Fukuyama-city 720-0001

要約

本研究の目的は、基礎看護学実習 I で看護学生が学んだ対象理解の視点を明らかにすることである。基礎看護学実習終了時の看護学生を対象に調査した結果、「人間関係の深まり」、「一人の人間として尊重」、「広い視点で患者理解」の3因子が抽出された。

人間関係が希薄、コミュニケーションが不得手といわれる学生には、「人間関係の深まり」は難しいものと思われ、人間関係形成への指導の必要性が示唆された。

Abstract

The purpose of this study was to clarify the attitudes toward understanding patients that nursing students had developed through Basic Nursing Practice I. A survey conducted among nursing students at the end of the practice course extracted three factors: "deepening human relationships," "paying respect as a human being," and "understanding patients from a broad perspective."

It seems difficult for students with poor human relation and communication skills to understand patients by "deepening human relationships," and this suggests the necessity of intervention to help them develop human relation skills.

キーワード：看護学生、基礎看護学実習 I、対象理解

Key Words: nursing students, the training course I for basic nursing understanding patients

緒言

基礎看護学実習 I の目的は入院患者の生活について実態を把握し、対象者への理解を深めること、人間関係の基本を学ぶこと、および、看護者の役割を学ぶことにある。

基礎看護学実習は学内で学んだ知識を実際の看護場面で統合することになり、机上で学んだ事に対象者と対面し確認していくことになる。学内演習では、患者役はモデル人形や、同僚であるが、基礎看護学実習は、未知なる他者との関わりを余儀なくされる経験である。

また、「青年期にある看護学生の心性の特徴は不安がいちばん特徴的である¹⁾」と述べられており、初めて実際の患者に接する学生の心理は緊張や不安は大きいものと思われる。

さらに受験戦争や就職難の社会を反映して、友人関係や人間関係が希薄²⁾といわれる学生には、受け持ち患者と対面し、対象を理解することは困難なものとする。

初歩的なコミュニケーションにより対象理解の視点がどのようなものか、明らかにしたいと思いこの研究に取り組んだ。

研究目的

基礎看護学実習 I で看護学生が学んだ対象理解の視点を明らかにし、今後の実習指導に対する示唆を得る。

研究方法

1. データ収集方法

1) 研究対象者

A大学の看護学科の1年生、基礎看護学実習終了時の学生で研究に同意の得られた看護学生 55名

2) 調査期間

平成19年2月15日～16日

3) 調査方法

質問紙による量的研究

4) 調査内容

先行文献³⁾を参考に看護学生を対象理解に関する調査項目を45項目作成し、非常にあてはまる(=4点)、ややあてはまる(=3点)、あまりあてはまらない(=2点)、全くあてはまらない(=1点)4段階評定法で回答を求めた。また、「自分は看護師に向いていると思うか」、「実習で成長できたと思うか」について同様に4段階で回答を求めた。

5) 分析方法

統計ソフトSPSS(Ver. 14.0)を使用し、記述統計および、平均値の差の検定には、3因子間では一元配置分散分析、その後多重比較、2群間ではt検定を行い、有意水準は $p<0.05$ とした。

2. 倫理的配慮

調査対象者に研究の目的、調査内容、調査方法について口頭で説明を行った。また、研究への参加は任意であること、参加の有無によって成績には一切影響しないこと、調査用紙への回答は無記名であり、個人は特定しないこと、調査用紙は、研究終了後は破棄することなどを説明し、協力を依頼した。回収は教室に回収箱を設置し、留め置き法で翌日回収した。

結 果

1. 回収数

1年生 59 名を対象に調査を依頼し、回収数は 55 名 (93.2%) であった。

2. 看護学生の対象理解に関する学び

評価項目の内的整合性検討のため、各評価項目の平均値、標準偏差を算出した(表 1)。各評価項目への対象者の回答は最大値 4 点から最小値 1 点の範囲にあり、評価項目の最も高い項目が、3.44 点、最も低い項目は 1.80 点、全項目平均値は 2.92 点、標準偏差は 0.388 であった。

各評価項目と総得点との相関係数は 0.166 から 0.620 であった。相関のあると判定できた 0.321 から 0.620 間での値をとることとし、8 項目を削除し、評価項目は 37 項目を因子分析の対象とした。全体の α 係数は 0.916 であり、一般に 0.700 以上を判断の基準とすることから信頼性はあると考えた。

看護学生の対象理解に関する学びを明らかにするために主因子法・バリマックス回転を行い、固有値「1」以上の基準を設け、因子負荷量が 0.4 未満あるいは共通性が 0.2 未満の項目を削除して分析した結果、17 項目選出した。Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測定は 0.704、Bartlett の球面性検定は有意確率 0.0001 をもって 3 因子が抽出された。

因子 1 は“患者さんとの間に信頼関係が築かれたと実感した”“患者さんと自分との間に次第に深まる喜びを実感した”“患者さんと自分との間に人間的な共感が生まれたと実感した”“患者さんとの関わりができる”“患者さんと自分との間の人間的なつながりが出来ると楽しいということを実感した”の 5 項目で構成され「人間関係の深まり」と解釈された。

因子 2 は、“病院以外での患者さんの生活を知ることが大切であると実感した”“一人ひとりの患者さんに応じた看護技術を使うことが大切だとわかった”“看護師と患者さんとの人間関係が大切であるということに実感した”“患者さんの人権を尊重することが大切であるということがわかった”“患者さん一人ひとりの心理を見ていかないと駄目だと実感した”“どんな患者さんも受け入れることが大切であるということがわかった”の 6 項目で構成され「ひとりの人間として尊重」と解釈された。

因子 3 は“狭い見方にこだわってはいけなくて駄目だと実感した”“自分の先入観で人を判断してはいけないということを実感した”“自分の中に看護について狭い思い込みがあったと実感した”“患者さんに巻き込まれずに客観的に見ることが大切だとわかった”“生活全体から患者さんを見るのが大切だと実感した”“患者さんの価値観や考え方の違いを理解することが大切だとわかった”の 6 項目で構成され、「広い視点で患者理解」

と解釈された。

因子の寄与率は、第1因子は27.089、第2因子は9.946、第3因子は7.832であった。また、信頼性検討のためのクローンバックの α 係数を算出したところ、第1因子は0.862、第2因子は0.787、第3因子は0.770で内部一貫性がみられた(表2)。

表1 各項目の平均値、標準偏差、相関係数 n=55

項目	平均値	SD	r
1 当たり前のこと気づかなかった自分に気づいた	3.13	0.70	0.166
2 家族と共に患者さんを支えることが大切であると実感した。	3.33	0.82	0.382
3 看護師と患者さんとの人間関係が大切であるということに実感した	3.69	0.66	0.453
4 看護師は患者さんのサポート役であるということがわかった	3.29	0.74	0.476
5 看護の仕事の中で楽しさを味わえることが幸せだと思った	2.95	0.89	0.46
6 患者さんのありのままの姿を受け入れることは難しいと実感した	2.84	0.88	0.285
7 患者さんから拒否されて患者さんのことが理解できたことがあった	1.80	0.68	0.377
8 患者さんと自分との間が次第に深まる喜びを実感した。	2.64	0.97	0.62
9 患者さんと自分との間に信頼関係が築かれたと実感した	2.16	0.79	0.599
10 患者さんと自分との間に人間的な共感が生まれたと実感した。	2.16	0.83	0.552
11 患者さんと自分との間の人間的なつながりが出来ると楽しい	3.05	0.89	0.483
12 患者さんと深くかかわりができると実感した。	2.73	0.85	0.433
13 患者さんにとって、病気のストレスは大変なものである	3.42	0.69	0.321
14 患者さんになにかしてあげたいという自分の気持ちの強さに気づいた	3.16	0.79	0.479
15 患者さんにはわかっていても出来ないということがありと実感した。	3.27	0.83	0.229
16 患者さんに巻き込まれずに客観的に見るのが大切だとわかった	2.87	0.75	0.354
17 患者さんの価値観や考え方の違いを理解することが大切だとわかった。	3.40	0.63	0.554
18 患者さんの自己決定を大切にすることが大切だと実感した	3.18	0.61	0.237
19 患者さんの人権を尊重することが大切であるということがわかった。	3.44	0.60	0.491
20 患者さんの正常な部分に目を向けなければいけないと実感した	2.67	0.82	0.34
21 患者さんの立場に立つということの大切さを実感した	3.35	0.78	0.466
22 患者さんの話から深い意味が聞きとれるようになったと実感した	2.20	0.70	0.539
23 患者さんの反応から自分自身に対する理解が深まった	2.40	0.76	0.251
24 患者さんは医療者の言動によって傷つけられていると実感した	2.27	0.95	0.609
25 患者さんは家族の素晴らしい態度に学ぶことがあった。	2.17	0.72	0.278
26 患者さんはどんな時でも希望を持ち続けていると実感した。	2.49	0.90	0.406
27 患者さん一人ひとりの心理を見ていかないと駄目だと実感した	3.36	0.68	0.492
28 事故防止や安全の大切さを実感した	3.71	0.53	0.442
29 自分のありのままの姿を出すことに対する自信のようなものができた	2.13	0.72	0.539
30 自分のかかわり方次第で患者さんを良い方向に持っていけると実感した	2.93	0.74	0.548
31 自分の考えを相手にきちんと伝えることが大切であると実感した。	3.20	0.73	0.438
32 自分の先入観で人を判断してはいけないということを実感した。	3.15	0.91	0.506
33 自分の態度を変えると患者さんが変わるということがわかった	2.48	0.93	0.546
34 自分の中に看護について狭い思い込みがあったと実感した	2.70	0.79	0.465
35 自分の中の人間的な幅が広がったと実感した	2.69	0.81	0.618
36 自分の人間関係の持ち方についての傾向を知ることが出来た	2.71	0.81	0.556
37 自分を恐れずに表現できるようになった自分自身を発見した	2.20	0.80	0.388
38 生活全体から患者さんを見るのが大切だと実感した。	3.35	0.75	0.372
39 狭い見方にこだわってはいけなくと実感した	3.22	0.76	0.509
40 知識だけでは看護はできないと実感した。	3.73	0.45	0.208
41 どんな患者さんも受け入れることが大切であることがわかった。	3.42	0.69	0.559
42 人間の身体ということがわかっていなかったということに気づいた。	3.31	0.81	0.267
43 人の役に立つことは大きな喜びであることを実感した	3.29	0.92	0.59
44 一人ひとりの患者さんに応じた看護技術を使うことが大切だとわかった	3.62	0.65	0.577
45 病院以外での患者さんの生活を知ることが大切であると実感した。	3.09	0.93	0.592

表 2 基礎看護学実習における対象理解の因子分析 (主因子法 バリマックス回転)

	因子1	因子2	因子3	共通性
項目 因子1「人間関係の深まり」 $\alpha=0.862$				
9 患者さんと自分との間に信頼関係が築かれたと実感した	0.799	0.213	0.109	0.386
8 患者さんと自分との間が次第に深まる喜びを実感した。	0.796	0.320	0.041	0.737
10 患者さんと自分との間に人間的な共感が生まれたと実感した。	0.741	0.038	0.170	0.696
12 患者さんとかかわりができると実感した。	0.626	0.293	-0.067	0.579
11 患者さんと自分との間の人間的なつながりが出来ると楽しいということを実感した	0.614	0.167	0.169	0.433
因子2「ひとりの人間として尊重」 $\alpha=0.787$				
45 病院以外での患者さんの生活を知ることが大切であると実感した。	0.151	0.734	0.092	0.482
44 一人ひとりの患者さんに応じた看護技術を使うことが大切だとわかった	0.064	0.648	0.109	0.255
3 看護師と患者さんとの人間関係が大切であるということに実感した	0.211	0.584	0.005	0.254
19 患者さんの人権を尊重することが大切であるということがわかった。	0.184	0.529	0.148	0.335
27 患者さん一人ひとりの心理を見ていかないと駄目だと実感した	0.214	0.523	0.111	0.331
41 どんな患者さんも受け入れることが大切であることがわかった。	0.128	0.509	0.242	0.524
因子3「広い視点で患者理解」 $\alpha=0.770$				
39 狭い見方にこだわってはいは駄目だと実感した	0.253	0.092	0.707	0.447
32 自分の先入観で人を判断してはいけないということを実感した。	0.217	0.018	0.690	0.256
34 自分の中に看護について狭い思い込みがあったと実感した	0.077	0.067	0.661	0.572
16 患者さんに巻き込まれずに客観的に見ることが大切だとわかった	-0.101	0.068	0.490	0.334
38 生活全体から患者さんを見ることが大切だと実感した。	-0.009	0.260	0.435	0.436
17 患者さんの価値観や考え方の違いを理解することが大切だとわかった。	0.109	0.278	0.406	0.570
因子負荷量の二乗和	4.605	1.691	1.331	7.627
因子の寄与率(%)	27.089	9.946	7.832	
累積寄与率(%)	27.089	37.034	44.866	

1. 抽出された各因子の平均値

抽出された3因子について因子2が最も高く、「3.44」、次いで、因子3「3.10」、因子1「2.55」の順であり、3因子間全てで有意差がみられた ($p<0.05$) (図1)。

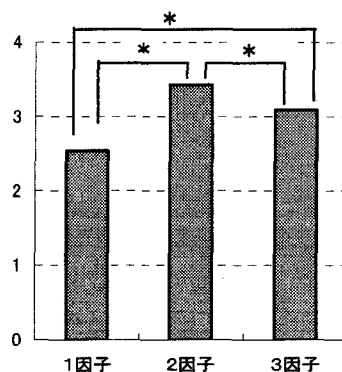


図1 3因子間の平均値の比較

2) 「自分は看護師に向いていると思うか」について

「自分は看護師に向いていると思うか」について、「非常にあてはまる」、「ややあてはまる」を『思う』群とし、「あまりあてはまらない」、「全くあてはまらない」を『思わない』群とし分析した。

結果、因子1から因子3の全てで『思う』方の学びが高く、因子1では『思う』2.70、『思わない』2.48、因子2では『思う』3.71、『思わない』3.27、因子3では、『思う』3.33、『思わない』2.96で因子2および因子3で有意差がみられた ($p < 0.05$) (表3)。

表3 自分は看護師に向いていると思うか

	思う	思わない	t値	p
因子1	2.70	2.48	-1.071	
因子2	3.71	3.27	-3.613	*
因子3	3.33	2.96	-2.676	*

* $p < 0.05$

3) 「実習により成長したと思うか」について

「実習により成長したと思うか」について同様に分析した結果、因子1から因子3の全てで『思う』方の学びが高く、因子1では『思う』2.69、『思わない』2.29、因子2では『思う』3.6、『思わない』3.14、因子3では、『思う』3.16、『思わない』2.97で因子1および因子2で有意差がみられた ($p < 0.05$) (表4)。

表4 実習により成長したと思うか

	思う	思わない	t値	p
因子1	2.69	2.29	-2.152	*
因子2	3.6	3.14	-3.728	*
因子3	3.16	2.97	-1.304	

* $p < 0.05$

考 察

1. 基礎看護学実習での対象理解の視点

基礎看護学実習1では学生は実習をとおして、対象を「ひとりの人間として尊重」し、「広い視点で患者理解」し、「人間関係の深まり」を学んでいたことが明らかになった。

基礎看護学実習の実習方法は主に見学実習である。「ひとりの人間として尊重」、「広い視点で患者理解」では、実習中の指導者の看護をモデルとして学ぶことができると考える。しかし、「人間関係の深まり」は、自己の体験の結果から得られるものである。今回の調査では、平均値は低くなっている。これは、基礎看護学実習では、1年次の段階で実施されるため、看護を行うのに必要な専門的知識は限られたものである。そのような

状況で、健康障害を持ち療養している患者の前に看護学生として立たなければならない。そのため、実習での学生のストレスは大きなものである。

また、学生にとって患者とのコミュニケーションは大きな課題の 1 つである。携帯電話やインターネットは普及した現代は若者のコミュニケーションや対人関係のありように変化が生じている⁴⁾。そのため、患者と直接向き合い、コミュニケーションをとることに困難を感じる者が多いと思われる。

初めての臨地実習の体験が負の体験とならないように、コミュニケーション能力の習得をめざし、段階的・継続的なコミュニケーション教育が必要⁵⁾と考える。

2. 対象理解の学びとの関連

対象理解の学びが高い者は、「実習により成長したと思う」と実習を肯定的に受け止めることができおり、「自分は看護師にむいていると思う」と看護職を前向きに受け止める事ができている。

百瀬⁶⁾らは看護学生に対して 1 週間の基礎看護学実習前後の自己効力感を測定しており、23 項目中 15 項目で実習後のほうが有意に高かったと結果を得ている。基礎看護学実習を体験することにより、「看護学生として看護師を目指し、やっていけそう」と遂行可能感⁷⁾を持っていることがわかる。

学生が初めて体験する基礎看護学実習で正の体験をすることは、その後の看護を学ぶ姿勢にも影響する事が分かった。

基礎看護学実習の体験をとおして、看護の喜びが感じられるように、また、学生自らが自己の人間性を磨きながら看護学生として成長していけるように、臨地実習指導者との協働作業で実習環境を整えていくことが重要であると考えられる。

結 論

1. 基礎看護学実習 I での対象理解の視点は「ひとりの人間として尊重」、「広い視点で患者理解」、「人間関係の深まり」で構成されていた。
2. 対象理解の学びについては、「広い視点で患者理解」、「ひとりの人間として尊重」「人間関係の深まり」の順に高かった。
3. 対象理解の学びと「自分は看護師にむいている」、「実習により成長した」との関連がみられた。

引用・参考文献

1. 服部祥子(1999), 青年期の心理と発達危機 看護学生を理解するために, 看護教育, 40(1); 12-19.
2. 松木光子(2003), 看護学臨地実習ハンドブック, 金芳堂; 42.
3. 落合幸子他(2005), 医療系大学生の実習からの学び尺度作成への試み, 茨城県立医療大学紀要, 11; 79-89.

4. 橋元良明他(1999), 子ども・青少年とコミュニケーション, 北樹出版; 1-25.
5. 松崎直子他(2007), コミュニケーションスキルを磨こう, 看護展望, 32(8); 17-23.
6. 岩井浩一他(2005), 臨地実習における患者—看護学生関係の構築に関する研究, 茨城県立医療大学紀要, 11; 123-134.
7. 坂野雄二他(2005), セルフエフェカシーの臨床心理学, 北大路書房; 2-4.
8. 原田真澄他(2003), 基礎看護学実習前後における看護学生の自尊感情, 日本赤十字愛知短期大学紀要, 14; 107-121.
9. 重久加代子(2003), はじめての臨地実習で経験したケアの本質, 看護教育, 44(2); 104-110.
10. 星光やよい(2005), 看護におけるコミュニケーション—基礎看護学実習レポートの分析—, 自治医科大学看護学部紀要, 3; 67-83.

(受理日平成20年1月10日)